

沖縄で考えさせられた本

脇本利紀 教授

(租税法)

私は元国家公務員ですが、2017年(平成29年)7月から2年間、沖縄県那覇市に所在する沖縄国税事務所で勤務しました。初めての沖縄勤務であり、立場上、沖縄県内の自治体幹部、関係団体、泡盛業界、マスコミ関係者など地元の皆さんにお会いする機会が想定されていましたので、大急ぎで沖縄に関する本を読んだのですが、その中から印象深い2冊をご紹介します。

①野里 洋「汚名 第二十六代沖縄県知事泉守紀」(講談社、1993年12月)

②田村洋三「沖縄の島守 内務官僚かく戦えり」(中央公論社、2003年4月)

戦前の知事は「官選知事」であり、政府が任命し、おおむね内務省の高級官吏が任命されていました。②は沖縄県の最後の官選知事である島田叡氏について、①はその前任者の泉守紀氏を描いたものです。

両名はともに東京帝国大学を卒業し、高等文官試験に合格して内務省に採用となった超エリートですが、後世の評価は対照的なようです。軍に非協力で慰安所設置に反対する一方、疎開に消極的で、みずからの獵官活動のためたびたび長期間沖縄を留守にし、米軍の沖縄侵攻の直前に異動となった泉氏。沖縄侵攻が確実視される中で沖縄に赴任し、住民の疎開に全力を尽くし、在任わずか5か月で戦死した島田氏。泉氏の行動を非難し、島田氏のそれを賛辞することは容易ですが、私がもしその立場であったならどのように考え判断するだろうかと思き換えてみると、正直に言って答えを見出せませんでした。特に島田氏は沖縄への赴任を断るといふ選択肢もあったわけですので、「立身出世」だけを考えたなら断るのが自然でしょうし、断ったとしても特段非難されるものではなかったと思います。誰かが行かなくてはならないとお考えになったようですが、赴任すると決断したことはやはり尋常でないと思います。最後は公務員としての使命に基づいて決断されたのでしょうか。同じ公務員として、もちろん時代も地位も立場も全く異なりますが、もしその立場だったら私にはそれほど使命感や覚悟があるのだろうかと思きさせられました。

在任中、国税事務所の部内広報誌(「国税おきなわ」)をみていたら、昭和49年8月1日号に「島田知事とのめぐり会い」という沖縄税務署の城間正祐氏(当時)の投稿を見つけま

した。その中に「いよいよ最後の地となった旧真壁村伊敷部落外れにあるトントガマという大きな自然壕に私たちはいた。そこへ島田知事は、六月十日頃来られたので、最年少の私が知事の一切の面倒を見ることとなった。当時、知事はアメーバ赤痢に罹り大分弱っていたが、幸い三、四日位で元気を回復され、私もやれやれと一安心しているところへ将校伝令が下士官一人を伴ってきた。「閣下、牛島司令官の命により参りました。閣下をお伴するようにとのことです。お伴させて戴きます。」という島田知事は予期した如く、直ちに国防服に着換え、夜陰に消えて行かれた。(六月十九日の夜九時頃と記憶している)そして、再び帰らぬ客になったのである。」というものでした。

②を読むと、島田知事が壕を出たのを「はっきり確定できなくて申し訳ありませんが、確か六月二十五日か二十六日の午前零時前でした」との証言が引用されています。確たることは申し上げる立場にありませんが、島守の最後は杳として知れないことは確かなのでしょう。

島田知事が兵庫県のご出身であったことが、戦後、沖縄県と兵庫県とが深い交流を続ける契機となります。私は、戦後72年を経て沖縄に赴任したわけですが、国税用務で地元関係各位にお会いする際に私の出身が兵庫県であることを告げると、「島田知事は兵庫県のご出身でしたね」、「島守之塔をご覧になると良いですよ」(戦没県職員を合祀する碑)、「奥武山公園には島田叡氏顕彰碑があります」、「高校野球では兵庫県にお世話になりました」、「兵庫県は有愛県なんですよ」といった反応が返ってきました。偶然、私自身が兵庫県出身であることで島田知事の存在の大きさをあらためて実感することとなりました。

①は現在、入手困難で読むことは難しいと思いますが、②は文庫(中公文庫)になっています。②のもう一人の主人公である荒井退造警察部長の生き方とともに時代背景は全く異なりますが、それでもなお公務とは何か、使命とは何か、ということを考えることができるのではないかと思います。

自己紹介文

脇本 利紀 (わきもと としき)

租税法を担当しています脇本です。私は、元国家公務員で、国税庁、国税局などで国税事務の執行に従事してきました。様々な個別事案に接する機会があり、税についてはいろいろ考える機会が多かったと思います。